人文知の本棚

『石橋湛山評論集』
（岩波書店、一九八四年刊）

石橋湛山は、明治時代から自由主義と民主主義の立場に立って我が国の言論界をリードしてきたジャーナリストで、戦後は総理にまで上り詰めた政治家である。膨大な著作を残しているが、その中から政治論を中心にとりまとめられたのが本書。石橋湛山と言っても知っている人は少ないが、大蔵大臣として戦後復興のそして高度成長の礎を築いた人であり、高橋財政を研究してきた筆者が、高橋是清と並んで尊敬している人物である。高橋は、国の富を生み出す要素の中で「労働ほど尊いものはない」としていたが、石橋も「経済上の資源として、一番根本的にして大切なるは、人資なること申すまでもない」としていた。両者ともに、経済や社会を考える上で人が第一だとしていたのである。

その石橋は、明治四五年の「国家と宗教及び文芸」と題する評論において、「国家も、宗教も、哲学も、文芸も、その他一切の人間の活動も、皆ただ人が人として生きるためにのみ存在するものであるから、もしこれらの或るものが、この目的に反するならば、我々はそれを変革せねばならぬ。しかるに、今の思想家ことに文芸家の一人もここに触れてこないのは、哲学の抽象的であり誤っておることを思わざるを得ない」としていた。石橋は、そのような考え方に基づいて、その実践として戦前の軍国主義を批判した。そして、敗戦後には人々が落ち込む中でも、更生日本の前途は洋々たるものであると述べたのだった。今日、私たちが人文知を実生活に生かしていくために、この石橋の精神と実践に学ぶべきところは大きい。

石橋は、そのような生き方を貫いたことから、戦前は軍部ににらまれ、戦後は吉田内閣の蔵相に迎えられたが占領軍ににらまれて公職追放の憂き目にあった。それでも、自らの信念を曲げることなく行動して総理にまでなった。病に倒れて総理在任期間は短かったが、総理退陣後も対米一辺倒の当時の風潮に流されることなく中ソとの関係構築に奔走し、その後の日中国交回復の土台を作った。また、長く立正大学の学長を務めた。日蓮宗の寺に生まれて宗教心に篤く早稲田大学哲学科を卒業した石橋にとって、健全な若者を育てることもまた自らの哲学の実践だったと言えよう。

国家公務員共済組合連合会理事長
元内閣府事務次官
松元 崇 Takashi Matumoto

内閣府退官後お茶を始め、裏千家東京第四西支部の副支部長。学生時代はボート部に所属し日本ボート協会理事。スタンフォード大学ＭＢＡ。熊本県で企画開発部長、財務省主計局で調査課長、次長などを勤めた。現在、高橋財政などの財政史研究を続けている。

ヒュー・ケナー『機械という名の詩神』
（松本朗訳、上智大学出版、二〇〇九年）

詩について考えるとき、ときどきひもとく本がヒュー・ケナーの『機械という名の詩神』である。カナダ出身の批評家の「メカニック・ミューズ」（原題）という名著。一九八七年に書かれた本だが邦訳が出たのは著者が二〇〇三年に亡くなった後のことだった。

パソコンで原稿を書くようになってから、わたしは何かに大きく閉じ込められているという感触に、絶えずつきまとわれるようになった。パソコンという機械の持つテクロジーが、わたし自身の原稿内容に大きく影響をもたらしている、という感触である。もちろん、それまで原稿用紙に万年筆で文字を書いていたときにも、原稿用紙の枡目の様式や筆記具の種類によって作品の流れが変わる、という経験はたびたびあった。しかしその場合はこちらから、そのときの気分に応じた用紙や筆記具を選択することで処理できた。

だが、機械の持つテクノロジーが持つ抑圧は圧倒的である。いつのまにかわたし自身が機械に慣れようとしているうちに、抑圧を感じないように慣らされてしまっている。

だが、そのことによって何かを失ったと考えるのは、どこかに何の抑圧もない理想的な表現手段や表現の場所がある、という神話にとりつかれていることと同じである。実は、そんなものはどこにもないのだ、と言っているのが本書である。

T・S・エリオット、エズラ・パウンド、ジェイムス・ジョイス、サミュエル・ベケットという四人のモダニスト作家の文学言語が、どのように同時代の機械によって生み出されたかを徹底的に分析した本書は、二〇世紀初頭の言葉の変化を捉えて刺激的だ。機械がもたらしたこの問題は、日本の大正中期から昭和初年代の詩人たち、モダニスト詩人ではなかった中原中也や萩原朔太郎の詩語にも影響を与えた。

たとえば、目ざまし時計によって人々が目覚め、朝の同じ時間帯に通勤する人々の足音をエリオットが詩のなかで描くとき、時計が刻む「時間」や「通勤」という、それ以前の時代にはなかった「抽象的なもの」を人々が共有し出したことを示していた。中原中也は同じ問題を詩「正午」で、「ぞろぞろぞろぞろ出てくるわ、出てくるわ出てくるわ」と丸ノ内のサラリーマンの昼休み風景を描いた。あるいは内燃機関の登場は人間の知覚のリズムを変えたとエリオットは言うのだが、萩原朔太郎は無自覚のまま汽車の疾駆する音のリズムを使って詩を書いていた。

その延長上で現在のインターネットの時代がわたしたちの言葉をどのように変えているか。そのことを考えるための貴重な一冊だ。

詩人
佐々木幹郎 Mikiro Sasaki

一九四七年奈良県生まれ。一九七〇年第一詩集『死者の鞭』で詩壇にデビュー。紀行文、評論、エッセイ、作詞など多彩な活動を展開。『新編中原中也全集』責任編集委員（二〇〇〇～二〇〇四年）、中原中也賞・サントリー地域文化賞選考委員なども務める。

人文知NOW

言葉の使い方が気になった時には「コーパス」

大学教員あての連絡に、「安否確認システムの登録について学生に**周知してください**。」と書かれているのを見かけた。周知は「する」ものではなく「させる」ものではないのだろうか。

『岩波国語辞典』（第八版）では次のように説明されている。

しゅうち【周知】広く人の間に知れ渡ること。「―の事実」「―徹底」

言い換えを試みると「学生に**知れ渡ってください**」とは言わない。「学生に**知れ渡らせて**ください」は言う。つまり、「周知させて」が素直な言い方だろう。

ところが、次に示す『デジタル大辞泉』のように「知らせること」との説明が加えてある辞書もある。

しゅうち【周知】世間一般に広く**知れ渡っている**こと。また、広く**知らせる**こと。「―の事実」「―の通り」「運動の趣旨を社会に―**させる**」

最後の例文は「周知**させる**」であるが、これは語釈一文目の「知れ渡っている」の例文であろう。語釈二文目の「知らせる」に注目し、それに言い換えてみると、「学生に**知らせさせて**ください」とは言わない。「学生に**知らせて**ください」は言う。つまり、この場合は「周知して」が素直な言い方になる。

国立国語研究所では、言葉の実際の使われ方を調べることのできるデータベース「コーパス」を構築し、公開している。『少納言』では事前登録なしで、一億語が収録されている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の検索ができる。このコーパスを調べてみると、「周知させる」と「周知する」はどちらも使われていて、どちらかというと「周知する」が多いという結果になった。

メディア別に見てみると、法律文では「周知させなければならない」という「させる」の用例が多いものの、「周知しなければならない」「周知すること」という用例も得られた。国会会議録、白書、広報紙では、「周知する」の用例の方が多かった。

自分の直感だけではわからない言葉の使用実態を確認することができる「コーパス」は、便利で、面白い。

国立国語研究所准教授
柏野和佳子 Wakako Kashino

専門は語彙論。言葉の用例収集、用例分析を日頃より行う。『岩波国語辞典』（第八版）編者の一人。『広辞苑』（第七版）の改訂にも携わる。

https://shonagon.ninjal.ac.jp/